

北医療薬会報

発行所 北海道石狩郡当別町金沢 1757 番地
北海道医療大学薬学部同窓会

☎ (0133) 23-0301 直通・FAX
☎ (0133) 23-1211 大学代表
発行人 桂 正 俊



JR 駅（新駅）から見た新キャンパス

<https://www.hoku-iryo-u.ac.jp/topics/information/1858623/>

目 次

巻頭挨拶 北海道医療大学薬学部同窓会会長 桂 正 俊	3
第 46 回 北医療薬 総会および医療薬学セミナーについて	4
定年退職される先生をご紹介します	5
定年退職される先生からのメッセージ	
大橋 敦子 教授 臨床薬理毒理学講座・薬学教育支援室	5
新任教授からのご挨拶	7
小田 雅子 教授 薬剤学講座・薬剤学	7
町田 拓自 教授 薬理学講座・病態生理学	9
室本 竜太 教授 分子生命科学講座・免疫微生物学	10
本同窓会 桂会長が日本薬剤師会功労賞を受賞されました	12
同窓生の職場紹介	13
株式会社ナカジマ薬局 札幌第 4 ブロックブロックリーダー 兼 桑園店店長 比嘉 耕基 先生	13
独立行政法人国立病院機構 北海道がんセンター 深井 雄太 先生	15
医療薬学フォーラム 2025 / 第 33 回クリニカルファーマシーシンポジウム 参加報告	
18 期 実務薬学講座・病院薬学 岩尾 一生 先生	17
令和 7 年度 第 6 回 将来ビジョン講座開催報告	
18 期 実務薬学講座・病院薬学 岩尾 一生 先生	19
第 6 回 薬学部同窓会 「卒業生・在校生合同懇談会」の報告	19
13 期同期会の開催	
13 期 実務薬学講座・実務薬学教育研究 早坂 敬明 先生	20
編集後記	21

巻頭挨拶

「同窓会誌第32号の発行にあたって」

北海道医療大学薬学部同窓会会長

桂 正 俊

同窓会誌第32号の発行にあたり、同窓生の皆様に心よりご挨拶申し上げます。また、平素より本同窓会の活動に対し、多大なるご支援と格別なるご協力を賜っておりますこと、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

本同窓会は昭和54年の設立以来、時代の荒波を越えながら歩みを進めてまいりました。現在では会員数6,765名の大きな組織へと成長し、そのネットワークは道内7支部、道外10支部の計17支部にまで拡大しております。北は青森から南は沖縄まで、日本全土に広がる同窓会の輪は、私たちの誇りです。今日に至るまでの歴史の積み重ねは、全国各地の医療現場において中核を担い、地域医療の発展に尽力されてきた卒業生一人ひとりのたゆまぬ努力の結晶にほかなりません。

さて、昨今の医療環境を見渡しますと、薬剤師に求められる役割はかつてないほど多様化し、高度化しています。こうした変革期にある現在の薬学教育において、病院や薬局での「実務実習」は、学生が単なる知識の習得を超え、医療人としての自覚と倫理観を育むための極めて重要なプロセスとなっています。全国に17の支部を持つ本同窓会にとって、実習先で同窓生が指導薬剤師として後輩を温かく迎え入れ、現場での直接的な交流が生まれている現状は、誠に喜ばしい限りです。教科書だけでは学べない現場の厳しさと喜びを、同じ学び舎で育った先輩から直接受け継ぐ。この実習現場での対話を通じて、大学で培われた「温かい人間関係と友情」が次世代へと確実に継承されています。学生たちが先輩方の真摯に働く背中を見て、自らの未来の姿を描く。この「実習を通じた絆」こそが、本同窓会の宝であると確信しております。

また、同窓会といたしましては、こうした世代を超えた交流をさらに加速させるべく、「卒業生・在校生合同懇談会」を継続して開催しております。この懇談会は、単なる進路相談や就職情報の提供の場にとどまりません。現場で活躍する皆様の実体験に基づくアドバイスや、就職後のキャリア形成を見据えたフォローアップを行うことで、後輩たちが不安を自信に変え、安心して社会へ飛び出せるよう力強い支援を行っております。

私たちの職能が大きな転換点を迎えている今こそ、同窓生同士の結束をより一層強固なも



のにする時です。大学運営と密に連携を取りながら、実習指導や学生交流を通じて、本同窓会の良き伝統を次代へと繋いでまいりましょう。

結びに、母校の益々の発展と、全国各地でご活躍されている同窓生の皆様の更なる飛躍、そしてご多幸を心より祈念いたしまして、巻頭のご挨拶とさせていただきます。

第 46 回 北医療薬 総会および医療薬学セミナーについて

令和 7 年 7 月 12 日（土）にホテルニューオオタニイン札幌で第 46 回目となる北医療薬 総会および懇親会が開催されました。本年度は、母校の大きな転換期を見据えた重要な方針が示されるとともに、学術的な研鑽を深めるセミナーが行われ、充実した時間となりました。

開会にあたり、本同窓会の元会長であり、1 期生として多大なご尽力を賜りました嘉陽 孝雄先生のご逝去が報告されました。出席者全員で黙とうを捧げ、心からの哀悼の意を表しました。

続く桂会長の挨拶では、アフターコロナにおける「支部の活性化」を最優先課題に掲げ、以下の 3 つの柱が示されました。

1. 大学移転への全面的な支援
2. 同窓会と現役学生の交流強化
3. 支部による出前授業の支援

（教員と高校の橋渡し役を担い、薬剤師の魅力を PR する）

総会後には医療薬学セミナーが開催され、札幌支部の多田先生に座長を務めていただき、本学客員教授の飯塚 健治先生より「心不全の新しいガイドラインを覗いて見る」と題してご講演いただきました。臨床現場で直面する心不全治療の最前線について、最新ガイドラインを読み解く貴重な学びの場となりました。





定年退職される先生をご紹介します。

令和8年3月をもちまして、吉村 昭毅 教授（生命物理科学講座（薬品物理化学））および大橋 敦子 教授（臨床薬理毒理学講座・薬学教育支援室）が定年退職されました。北海道医療大学の薬学教育への多大なご貢献に心より感謝致します。

定年退職される先生からのメッセージ

定年を迎えて

臨床薬理毒理学講座・薬学教育支援室 大橋 敦子 教授

2003年に薬学部臨床薬理毒理学教室に着任して以来23年が過ぎようとしています。2025年から薬学教育支援室に移り、2026年3月に定年を迎えます。引き続き、薬学教育支援室の生理学・薬理学担当として教育に携わる機会を戴くことになりましたが、一旦ここで退職のご挨拶をさせていただきます。ここまで教職員の皆様のご指導・ご支援をいただきながら無事に勤めることができました。日々お世話になりました教職員の皆様、講義・実習や研究で一緒に時を過ごした学生さんたち、卒業後に地域医療を支える人材となり実務実習や地域懇談会などでご支援くださった同窓生の皆様に心より感謝申し上げます。



私は雪が降らない兵庫県加古川市の出身で、雄大で美しい自然に憧れて北海道にやってきました。入学した北大獣医学部は6年制教育が始まった頃で、当時は全員が修士課程に進学する仕組みでした。勉強や研究より映画や本が好きな困った学生でしたが、薬理学教室に所

属しご指導のままに修士論文をまとめてみて初めて面白いと思いました。卒業後は東京都老人総合研究所(現東京都健康長寿医療センター)にて人生の師である先生方に会い、自律神経生理学と老化研究に取り組みました。そのご縁により島村佳一先生に臨床薬理毒理学教室に迎えていただきました。

着任当時は薬学部 4 年制の終わり頃で、臨床薬理毒理学教室には優しくて面倒見のよい木村真一先生がおられました。先生方と修士課程の学生さんたちと一緒に、パッチクランプ実験やストレス負荷実験に取り組む日々を過ごし、毎週土曜の午前中には論文の抄読会も開かれていました。2006 年度に 6 年制が始まると修士課程がなくなり、5-6 年生全員が卒業研究を行うカリキュラムとなって新承認薬の作用機序を調べる文献研究を行なっていました。木村先生が薬学教育支援室に移られたあと、鹿内浩樹先生が来られて免疫染色や電気生理を用いた新しい研究が動き始めました。島村先生の後任には泉剛先生が着任されて強制水泳によるうつ病モデル実験が始まり、進藤つぐみ先生を皮切りに博士課程の学生さんたちが増えてきました。現在は、先生方と博士課程の学生さんたちと 5-6 年生たちが一致団結して、うつ病の発症機序に関する研究が着々と進められています。

薬理系の教員として、生理学と薬理学(内分泌代謝系疾患と治療薬)の講義と薬理学実習を担当し、CBT 対策や国試対策を行なってきました。薬剤師国家試験に合格するにはコツコツ積み上げる勉強が不可欠です。教員ができることは、興味深く分かり易い講義(実行は難しかった)、分かり易い講義資料(頑張ったつもり)、過去問の丸暗記では解けない試験問題(毎回工夫しました)と考えて、取り組んできました。問題が難しすぎる細かすぎるとよくお叱りをいただきましたが、コツコツ勉強する大切さに早く気づくきっかけになればと願っていました。薬理学実習は、ラットを用いた血圧測定・気管平滑筋標本・血管平滑筋標本・灌流心標本などの方法に、毎年島村先生が改良を重ねておられました。早く帰りたい人たちにはあまり伝わらなかったかもしれませんが、ライブで薬の効果を観察できる貴重な実習と思っています。

着任当時、本学薬学部は薬剤師国試合格率全国トップクラスを誇り人気絶頂でした。しかしその頃から、他県で薬学部が乱立して道外から来る学生が減少し、一方で薬学部はコストが悪い(学費が高い上に国試が難しい)と人気低下し、その上に日本全体の少子化が急激に進んでしまいました。現在の薬学部はこの荒波を乗り越えようと教職員全員で一生懸命漕いでいます。

まず 2011 年に、吉村昭毅先生と木村真一先生により薬学教育支援室が立ち上げられました。

マンツーマン教育やグループ教育、定期試験対策やセミナーなどが行われ、15年間引き継がれて、今は鈴木一郎先生をリーダーとして私を含め4名の教員が担当しています。山口由基先生のグループワークゾーンでは、いろいろな学生さんが教えたり教えてもらったりしながらそれぞれ楽しそうに勉強しています。試験前だけでなく普段から夜7-8時頃まで残って勉強している優秀な1年生や、支援室で質問して初めて苦手科目が再試験にならずに合格できた元気な3年生もいます。自習サイレントゾーンは演習試験に追われる6年生や定期試験・再試験前に多く利用されています。ご縁があって本学を選んでくれた学生さんたちが医療人として幸せな人生を送ってくれることを心から願って、少しでも役立てるように進めたいと思います。

さらに最近、本学出身の若い先生方が薬学部を中心に前向きに進む時代に移ってきています。学内だけでなく薬ゼミとも協力して、CBT・国試対策セミナー、解説講義、スクーリング、高校訪問、新しい入試、国際交流、オープンキャンパス、地下歩道やエスコンでのイベントなど、薬学部を活性化する様々な取り組みが進められています。この調子で薬学部の勢いが高まり、新天地北広島での新たな出発がさらなる発展と革新に繋がることを心より祈念いたします。

新任教授からのご挨拶

「教授就任にあたって」

薬剤学講座・薬剤学 小田 雅子 教授

この度、令和7年（2025年）9月1日付で、薬剤学講座（薬剤学）教授を拝命いたしました。薬学部同窓会の皆様に新任のご挨拶を申し上げます。

私は1988年に北海道大学薬学部を卒業後、北海道大学医薬部附属病院薬剤部研修生となりました。北海道医療大学薬学部薬剤学教室の高田昌彦教授にお声がけいただき、同年、東日本学園大学（当時）薬学部の助手として研究をスタートさせました。宮崎正三助教授（当時）のご指導のもと、温度感受性ゲル剤、キチン・キトサン高分子を用いたDDS、高田昌彦教授のご指導のもとβ-シクロデキストリンを用いた口腔乾燥症改善のためのDDS等、薬剤学・製剤学の分野において多様な研究に携わってまいりました。その後、高田昌彦教授の後任にあ



たる齊藤浩司教授のもと、生物薬剤学的アプローチに基づきラットや培養細胞を用い薬物の消化管吸収・腎排泄に関する研究を継続するなか、2004 年 4 月より北海道医療大学大学院薬学研究科博士課程に社会人大学院生として進学し、2007 年 3 月に「多剤排出担体 P-糖タンパクの輸送機能の制御に関する研究」により博士（薬学）の学位を取得いたしました。

現在は、主にラットを用いて消化管吸収、胆汁排泄、腎排泄に関する実験を行っており、トランスポーターと病態（がん、急性腎臓病、慢性腎臓病）の関連に焦点をあてたテーマで研究を推進しています。さらに、医療現場からの問題提起に基づく共同研究にも積極的に関わっております。今後も薬物トランスポーターを軸とした生物薬剤学的研究を基盤に、基礎と臨床をつなぐ研究を推進してまいります。

教育面では、2009 年からは薬学部講師、2014 年には薬学部准教授となり、学生の指導にもあたるようになりました。少子化や大学間競争の激化に加えて国家試験合格率の低迷により、本学薬学部は厳しい状況にあります。しかし、「薬剤学は実務と密接に関わっている大切な分野だ」という信念を持ち、これまで培ってきた教育・研究の経験を生かし、講義・実習を通じた知識と技術の修得、豊かな人間性、そして主体的に課題を解決する力を備えた薬剤師育成に貢献するため、今後も努力を重ねてまいります。

2 年後には北広島に新キャンパスが設置されます。これを飛躍の契機とすべく、気持ちを新たにしつつ、歴代の教授の先生、卒業生の皆様、関わった数多くの皆様の思いや実績を大切にしながら、大学および研究室の発展に尽力する所存です。今後とも変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

最後になりましたが、薬学部同窓会の皆様の益々のご発展とご健勝をお祈り申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

「教授就任にあたって」

薬理学講座・病態生理学 町田 拓自 教授

この度、令和7年9月1日付で飯塚健治教授（現名誉教授）の後任として、薬理学講座（病態生理学）教授を拝命いたしました。北医療薬の皆さまに新任のご挨拶を申し上げます。

私は平成11年に本学薬学部を卒業後、大学院薬学研究科に進学し、薬理学教室の平藤雅彦教授（現名誉教授）のご指導のもと、「ドコサヘキサエン酸による血管平滑筋細胞での誘導型酵素発現に及ぼす影響」で博士



（薬学）の学位を取得いたしました。博士課程在籍中の平成15年からは2年間、米国コーネル大学医学部薬理学研究室（故 Roberto Levi 教授）に留学し、循環器薬理学に関する基礎研究に携わりました。

学位取得後、平成18年4月に薬理学講座の助手として採用されて以来、平成19年に助教、平成21年に講師、平成27年に准教授を拝命し、薬理学および薬物治療学の教育・研究に従事してまいりました。

この道を歩むきっかけは、4年次の研究室配属で薬理学教室を希望したことにあります。もともと生物が好きで、生物系の研究室の中から薬理学教室を選んだのですが、配属先は、故南勝先生（名誉教授）、平藤雅彦先生、遠藤泰先生（名誉教授）、浜上尚也先生（現薬学部長）という錚々たる先生方がそろい、当時最も研究の盛んな研究室の一つでした。部活動に熱中するかのように日夜研究に励む大学院生に囲まれて過ごすうちに、大学院進学は自然な選択となり、私もそのまま進学いたしました。

南先生、平藤先生は研究に一切の妥協がなく、指導も厳しいものでしたが、その根底には教育者としての誠意と温かさがあり、一人でも多くの大学院生を研究者として育てようという強い思いが感じられました。この熱意あるご指導こそが、本学出身の研究者を育て、私を含む多くの同窓生教員が誕生した要因であると感じています。

私が本学に勤め始めて20年が過ぎましたが、この間、薬学教育を取り巻く社会情勢は大きく変化し、そのスピードは加速度的に増しています。特に近年は18歳人口の急速な減少や、学生の学力と薬剤師国家試験の難易度の乖離が顕在化し、薬学部を廃止する大学も出るなど、待ったなしの状況にあります。本学薬学部が魅力ある薬学部であり続けるためには、さまざまな改革が必要であると痛感しています。

そのような中で、本学薬学部には同窓会との強いつながりという大きな強みがあります。私自身、同窓会理事として活動する中で、同窓生の皆さまが本学と在学生のことを真剣に考え、支援や広報活動に積極的に取り組んでくださる姿を目の当たりにして、同窓生としても教員としても大変心強く感じています。教員としては、このご支援を最大限に活かし、在学生の成長を支えるとともに、在学中から同窓会を身近に感じ、卒業後も母校を大切に思ってくれる人材を育てていきたいと考えています。

本学薬学部の使命は、一人でも多くの学生を薬剤師国家試験に合格させるべく、確かな教育を提供することにあります。しかし、私自身が本学大学院で基礎研究の意義や手法、論理的思考、論文執筆などを学んだ経験から、在学生にも研究の魅力を知ってほしいと願っています。その中で基礎研究の重要性を実感し、それを臨床研究に応用できる力を備えた人材を育成してまいります。

同窓会の先生方には今後とも変わらぬご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。最後に、同窓会のさらなる発展と、皆さまのご健勝をお祈り申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

「教授就任にあたって」

分子生命科学講座・免疫微生物学 室 本 竜 太 教授

2025 年 4 月 1 日付で、岡崎克則教授の後任として分子生命科学講座(免疫微生物学) 教授を拝命いたしました。ここに、薬学部同窓会の皆様に謹んで新任のご挨拶を申し上げます。



私は 2002 年に北海道大学薬学部を卒業後、同大学院薬学研究科に進学し、衛生化学研究室において松田正教授のご指導の下、免疫学、特に免疫応答の諸局面で重要な役割を担うサイトカインの機能発現機構(細胞内シグナル伝達およびその制御機構)に関する研究に従事し、博士(薬学)の学位を取得いたしました。2007 年 4 月から 2025 年 3 月までの 18 年間は、北海道大学大学院薬学研究院・薬学部において助教、講師、准教授として、サイトカインのシグナル伝達研究を中心に研究活動を継続するとともに、薬学教育に携わってまいりました。このたびご縁を賜り、本学教授として着任いたしました。前任地在職中より、同じ北海道内の薬学部というご縁で交流のあった先生方にも温かくお迎えいただき、深く感謝しております。また、本学学生の成長に大きな期待を抱きつつ、教育活動に取り組んでいるところでございます。

当研究室では、サイトカインによる免疫・炎症制御機構の解明(免疫学的視点)ならびに

ウイルス・細菌感染症の予防・治療法の確立（微生物学的視点）を主要な研究テーマとして推進してまいります。免疫の異常は、感染症やアレルギーにとどまらず、がん、糖尿病、循環器疾患など多様な疾患の発症に関与しております。さらに免疫は、疾患発症のみならず治療においても重要であり、免疫学研究を基盤として創出された抗体医薬は医薬品分野における成長領域の一つとして位置づけられ、承認品目数も年々増加しております。私どもは、多面的視座から免疫・微生物関連疾患（ウイルス・細菌感染症、自己免疫疾患、アレルギー、がん等）の病態解明に取り組み、将来的に社会へ還元し得る研究成果の創出を目指してまいります。

高度な知識と倫理観を備えた医療人（薬剤師）を養成し、病院・薬局をはじめとする薬学の現場に有為な人材を安定的に輩出し、北海道の地域医療と住民の健康を支えていくことは、本学の将来にわたる重要な社会的使命であると存じます。質の高い講義および実習を継続的に提供することはもとより、これまで基礎研究に注力してきた経験を踏まえ、本学においても基礎研究を通じた教育を重視し、学生の論理的思考力およびリサーチマインドの涵養に力を尽くしたいと考えております。今日では、教科書や青本（薬剤師国家試験対策参考書）に記載されているような既存の研究成果に基づく体系化・活字化された知識については、ChatGPT等の大規模言語モデル AI が要点を的確に整理・提示する（教員よりもうまく説明できてしまうことも多い）時代となりました。しかしながら、大学における研究や学びの本質的価値は、いまだ言語化・活字化されていない独創的かつ最新の知見を創出する点にこそ存するものと確信しております。大学という場には、本格的な研究を自ら体験できる貴重な環境と機会が備わっております。本学学生には、限られた時間の中でもそのような経験を可能な限り提供してまいりたいと存じます。科学の作法を学び、「自らの手で未知を既知に変える」過程を体験することによって培われる力、課題発見力、問題解決能力、論理的思考力等は、医療現場に立つ専門職としてのみならず、社会人としても不可欠な本質的能力であります。これらは、「試験に出ることだけ勉強する」ことで取得する「単純な知識」とは明確に異なるものであります。また、社会問題や技術革新により急速に変化し、将来予測が困難な時代を生きる学生にとって、変化に対して強さとしなやかさをもって対応する力の基盤となるものと信じております。私は、本学学生が社会にとって有為な人材として大きく羽ばたき、その活躍の場を広げていくことができますよう、教育・研究の両面において最大限の努力を尽くす所存でございます。

末筆ながら、本学薬学部同窓会の皆様のみすますのご活躍とご健勝を心より祈念申し上げます。

ます。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

本同窓会 桂会長が 日本薬剤師会功労賞を受賞されました

この度、本同窓会の桂会長が、長年にわたる薬剤師職能への貢献が認められ、「日本薬剤師会功労賞」を受賞されました。

これを受け、去る総会の折、これまでの輝かしいご功績を称え、同窓会から桂会長にお祝いの花束を贈呈いたしました。長きにわたり、本同窓会の発展のみならず、薬剤師の地位向上にご尽力されてきた桂会長のご受賞は、我々同窓生にとっても大きな誇りと喜びとなりました。



同窓生の職場紹介

北海道医療大学 広報部 入試広報課が、学生が薬剤師としての将来像を想像できるよう、様々な場で活躍する卒業生取材させていただきました。その取材内容は学生だけでなく、同窓生にとりましても大変有意義なものですので、同窓会誌にも掲載させていただきます。

なお、掲載内容に関しましては、アンケートにお答えいただき、それに基づき、広報部 入試広報課が作成させていただきましたものです。

株式会社ナカジマ薬局 札幌第4ブロックブロックリーダー 兼 桑園店店長
比 嘉 耕 基 先生



— 今の職場を選んだ理由を教えてください。

薬剤師という職業をはじめて知ったのは、中学生1年生の時でした。友人の親が調剤薬局を経営しており、薬剤師という仕事を教えてもらいました。もともと化学や数学など理系の教科が得意だったこともあり、少し興味を持ちましたが、その時は将来の自分の職業になるとは考えていませんでした。中学3年生の時に、父が糖尿病で入院したことをきっかけに薬剤師という職業を本気でめざしてみようと考えました。入院中の父に面会に行くと、いつも多くの種類の薬と、インスリンという注射を打っていました。なぜ父はここまで薬を飲み、注射を行わなければいけないのか、どうにか病気を治す手助けができないかと真剣に考え、薬のスペシャリストである薬剤師をめざそうと決意しました。大学卒業後は、まず札幌市内の病院で8年間勤務しました。病院では、入院する患者さんの治療のサポート、新人薬剤師

の育成、手術室や ICU における薬剤師の仕事などを行っていました。病院で仕事を行う中で、経営管理や組織運営といったマネジメントという仕事にも興味が湧いてきました。病院では、薬剤部長や薬局長が、薬局のスタッフをまとめたり目標を作ったりしますが、病院でマネジメントを行うには、まだまだ時間がかかるため、比較的早い段階からマネジメント職をめざせる調剤薬局でマネジメントを学ぶため、現職のナカジマ薬局に転職しました。

— 現在の仕事内容を教えてください。

現在はいくつかの仕事を並行して行っています。まず、札幌市内の数店舗の運営状況等を確認するブロックリーダーの仕事、次に、一つの薬局の薬局長の仕事、そして、薬剤師として薬の調剤や説明・指導を行い患者さんの治療をサポートする仕事です。また、本社業務として、災害対策・訓練に関わる業務、薬剤師の知識や学術部分に関わる DI 業務なども行っています。ブロックリーダーの仕事は、各薬局長の目標設定や悩んでいる部分を一緒に協力し解決していくことにやりがいを感じています。

薬局長は薬局で働いているスタッフ（現在受け持っている店舗は 15 名）と連携して患者さんへお薬を渡し、薬局全体で一人一人の患者さんがしっかり病気の治療ができる環境を作っていくことにやりがいを感じています。ブロックリーダーの仕事も薬局長の仕事も、人と人の橋渡しをする仕事なので、毎回違う課題があり、解決することの難しさも感じますが、それもやりがいのひとつです。マネジメント職としても、いち薬剤師としても、患者さんの病気が治り感謝された時は何物にも代えがたい達成感があります。そしてこれは社外の業務ですが、心臓マッサージや AED の使い方を教える「BLS インストラクター」という資格を持っているので、心臓発作を起こした人を助けられる環境を一人でも多くの人に教育することを目標に活動しています。

— 大学での学びが生きているのはどんなところですか？

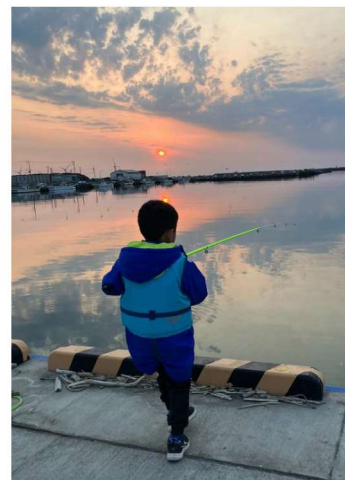
私は沖縄出身で、沖縄では薬剤師になれる大学がないため、単身大学入学のために北海道に来ました。北海道医療大学は、沖縄出身の在学生・卒業生もおり、とても親しみやすい印象がありました。大学では 4 年生からゼミ室に配属され、そこで仲の良い友人と出会うこともできました。病態生理や薬理学という分野が私はとても苦手で、何度も再試験を受けることになってしまいましたが、その時に一生懸命ゼミの仲間と勉強し、試験をクリアすることができました。その経験は、今も難しい場面に出会ったときに乗り越える力として身につ

ています。また、大学時代はバスケットボール部に所属していました。薬学部以外の学生もおり、部活仲間とは今も連絡を取り合う仲です。

Private interview

— 社会人としての仕事以外の楽しみは何ですか？

休日は息子2人のサッカー観戦に明け暮れています。小学生の息子2人の試合を見に行くことが、妻と私の趣味のひとつになっています。それ以外にも、自宅の庭に野菜や花を植えてガーデニングをすることや、家族で釣りや旅行に行くことも楽しみの一つです。仕事の日と休みの日を明確に分けて、休みの日をしっかり確保することで時間を捻出しています。



独立行政法人国立病院機構 北海道がんセンター 深井雄太先生



— 今の職場を選んだ理由を教えてください。

具体的なことはよくわからないし大変そうだけど、やりがいがありそうな仕事だなと感じていたので薬学部に進むことを選びました。在学中から、父のように他の医療職と連携して働けそうな病院の薬剤師になりたいなという漠然とした希望を持っていましたが、具体的に今の職場への就職を決めたのは大学5年生の現場実習の時で、医療の現場を経験して将来のことを色々と具体的に考え始めた時期でした。自分の祖父母ががんで亡くなっていたため、がん医療や終末期医療に携わりたいという気持ちがあり、どうせやるなら最前線の医療に参加できる場所で、と考えて北海道がんセンターへの就職を決めました。また、薬剤師の資

格取得後にも、さらにステップアップした認定薬剤師や専門薬剤師という資格の存在を知り、それらの資格取得にもチャレンジできる職場だったことも選んだ理由です。

— 現在の仕事内容や資格取得までの道のりについて教えてください。

就職時はいち薬剤師として勤務を始めました。病棟や医療チームに参加して経験を積み重ねていただきながら、8 年目に「がん専門薬剤師」と「緩和薬物療法認定薬剤師」の資格を取ることができました。「がん専門薬剤師」の試験は診療ガイドラインや薬の添付文書などさまざまな問題が出るので、毎朝 4 時間、仕事に行く前に勉強をしていました。現在は病棟業務管理主任として、自分も乳腺科の病棟で患者さんへの説明や薬物療法に関する様々な業務を担当しながら、他の病棟で活躍している後輩の薬剤師たちのフォローや育成を行っています。

— やりがいを感じるのはどんな時ですか？

人間を相手にするので、やはり正解がないことも多く、それが難しいと感じます。薬物治療については大学でも学びますが、日々どんどん進歩していくので置いていかれないように勉強して、情報をアップデートしていくのは大変です。がんという命に関わるというイメージが強い疾患だからこそ、患者さんも必死ですし、思うようにいかない時の患者さん本人のつらさは筆舌に尽くし難いものがあります。だからこそ、うまく治療が進んだ時の達成感ややりがいは他ではなかなか味わえないものがあると思いますし、患者さん本人から「あなたのおかげで治療を続けて完遂することができた」「つらかったけどおかげでこんなに良くなった」と言っただけだと、心からこの仕事を頑張っていて良かったなという気持ちにさせてもらえます。

— 大学での学びが生きているのはどんなところですか？

薬学部は授業が多くて大変に感じることもありましたが、その授業はどれも薬剤師として働くうえでの基礎となっているように感じます。実習で実際に錠剤や軟膏を作った経験もそうですし、卒業研究で薬理研究をしたりした経験は、薬剤師としての幅を持たせてくれました。実は勉強よりもとにかく部活に全力だった大学生活だったのですが、社会人 OB などとも関わる機会がある大学の部活では、社会人としての物の考え方や捉え方、振る舞い方など多くのことを学ばせていただきました。部活が本当に楽しくて、部活棟にいることが多く、休日や放課後も部活の友達と過ごしていることが多かったです。ゆるく楽しむ、というよりし

っかり本気で取り組む部活でしたので、練習はキツかったのですが、みんなで大会に遠征したり、休みの日にはドライブなどに出かけたり、楽しい思い出がたくさんあります。大学の部活動は高校までとは一味違って、一緒に過ごす時間や密度が特に高かったように感じますし、当時の友達は現在看護師や心理士として働いていますが、今でも非常に仲良くしています。

Private interview

— 社会人としての仕事以外の楽しみは何ですか？

家族と過ごす時間が楽しいです。家庭菜園をしているので、二人の娘と野菜を育てたり採れた野菜で料理をしています。一人の趣味としては映画鑑賞が好きで、たまに平日休みが取れた時は映画館に行っています。仕事も忙しいですが、職場全体であまり残業せずに仕事が回るように取り組んでいるので、趣味の時間も取れているのかなと思います。



医療薬学フォーラム 2025 / 第 33 回クリニカルファーマシー シンポジウム 参加報告

18期 実務薬学講座・病院薬学 岩尾 一生 先生

2025年6月28日(土)・29日(日)、北海道旭川市の大雪クリスタルホールと道北地域旭川地場産業振興センターを会場に、「医療薬学フォーラム 2025 / 第33回クリニカルファーマシーシンポジウム」が「時を超える医療薬科学」をテーマに開催されました。2020年に札幌市で開催予定だった第28回が新型コロナウイルス感染症の影響により開催中止となったことから、北海道での開催は2011年(第19回・旭川市)から14年ぶりとなりました。本フォーラムは、日本薬学会・医療薬科学部会が主催する大会ということで、日本薬学会会員を中心に全国各地から薬剤師や薬系大学の教員・学生が多数参加されました。また、一般演題はポスター発表のみで、シンポジウムを中心としたプログラムであるため、講演をじっくりと聴講できた大会と



なりました。

今回私は、シンポジウム 11「薬学臨床系教員の現状」の中で「附属病院・地域包括ケアセンターを活用した薬学教育への取り組みと課題」と題して、実務薬学講座を代表して講演させていただきました。このシンポジウムでは、他に 3 名の実務系教員の先生から講演があり、福岡大学の先生からは附属病院薬剤部のレジデント教育に対する教員の関わりについて、慶應義塾大学の先生からは薬学 6 年制課程を修了した教員による附属薬局を活用した教育・研究について、北海道科学大学の先生からは医療機関に常駐する教員の実務や教育への取り組みについて紹介されました。

私の講演では、本学薬学部の講義・実習内容のうち、実務系教員が担当しているあるいは特色のある教育内容として、実務社会薬学複合演習（6 学年）や医療薬学Ⅲ実習（4 学年；共用試験 OSCE 前の実務系実習）、附属病院における長期実務実習（5 学年）や卒業研究指導（5～6 学年）、地域包括ケアセンターにおける医療福祉活動演習（3 学年）や全学連携地域包括ケア実践演習（4 学年）等を中心に、附属施設を活用した実践力を高める教育内容について紹介させていただきました。本学薬学部における教育では、実務実習をはじめとして様々な場面で同窓会員の先生にご協力いただいております。本講演でご紹介した医療福祉活動演習におきましても、同窓会長の桂先生（12 期）をはじめ多くの先生方に学生教育の一端を担っていただいております、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。また、本講演中や講演後には、本学の取り組みに対して他大学の教員の方から様々なご意見や温かいお言葉をいただきました。

今後も、高い実践力を備えた学生を輩出するためにも、実務薬学講座全体で学生教育へ尽力して参りますので、同窓会員の先生には引き続きご指導ご鞭撻を賜りますよう、宜しくお願ひ申し上げます。



令和7年度 第6回将来ビジョン講座 開催報告

18期 実務薬学講座・病院薬学 岩尾 一生 先生

令和8年2月10日（火）、令和7年度第6回将来ビジョン講座が本学札幌サテライトキャンパスを配信会場にハイブリッド形式で開催されました。講師には、高崎健康福祉大学薬学部薬剤疫学研究室/臨床薬学教育センター教授で、本学薬学部第18期卒の岡田（旧姓 今野）裕子先生をお招きして「日常業務からの臨床研究のすすめ方～コラボレーションに一步踏み出すための後押し～」と題してご講演いただきました。座長は同窓会副会長で同期でもある大澤（旧姓 前田）祐貴子先生が務められ、アットホームな雰囲気の中で盛会裏に終了しました。

その後、会場を移し、仕事で講演に間に合わなかった同期も合流して、お酒やお料理を楽しみながら、近況を報告したり、学生時代の話に花を咲かせて、楽しいひとときを過ごしました。



第6回 薬学部同窓会

「卒業生・在校生合同懇談会」の報告

令和7年10月20日（月）、ANAクラウンプラザホテル札幌にて、第6回目となる「卒業生・在校生合同懇談会」が開催されました。

本会は、実社会で活躍する同窓生と、これから進路を決定していく在学生（4年生・6年生）が直接交流し、薬剤師の仕事に対する認識を深め、不安や悩みを共有することを目的としています。今回は「薬学部業界研究セミナー」と同日の開催ということもあり、例年以上に多

くの学生が参加しました。

会場では、病院、調剤薬局、行政、企業など、多方面で活躍する卒業生が各テーブルに分かれ、後輩たちの質問に耳を傾けました。「現場でのやりがいは?」「国家試験の乗り越え方は?」といった切実な問いに対し、先輩たちが自身の経験を交えてアドバイスを送る姿があちこちで見られました。在校生からは「現場の先生方の生の声を聞くことができ、将来のイメージが明確になった」との声が寄せられ、非常に有意義な交流の場となりました。



13 期同期会の開催

13 期 実務薬学講座・実務薬学教育研究 早坂敬明先生
令和7年5月17日(土)、ジャスマックプラザホテルにて「13期同期会」を開催いたしました。

本来であれば、卒業後30周年の節目に集まる予定でしたが、長く続いたコロナ禍の影響により開催を見送っておりました。今回は、第72回北海道薬学大会の開催に合わせ、実に数年越しに念願の集まりを実現することができました。

当日は、久々の再会に会話が尽きることなく、3時間の予定もあっという間に過ぎるほどの大盛況となりました。卒後30年を経て、それぞれのフィールドで活躍する仲間たちの姿は、互いにとって大きな刺激と励みになったことと思います。

急なご案内となったにもかかわらず、遠方から駆けつけてくださった皆様、そして開催に向けてご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

今回は惜しくも参加できなかった皆様も、次回開催時には、ぜひ元気な顔を見せてく

ださい。また笑顔で再会できる日を楽しみにしております。



編集後記

表紙は、2028年、Fビレッジに開設予定の北広島新キャンパスの外観イメージです。詳しくは大学のホームページをご覧ください。今後も同窓生一人ひとりのネットワークを強固にし、現役生や地域社会に貢献できる同窓会を目指したいと思います。 (M. H.)